
みなみなみななななみの二次元主義生活及びその周囲の人達の非日常的日常生活

零崎吊識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みなみなみなななみの一次元主義生活及びその周囲の人達の
非日常的日常生活

【ISBNコード】

284410

【作者名】

零崎吊識

【あらすじ】

日常。その程度は人によつて異なります。
自分にとつての日常が、実は他人にとつては非日常だつたり。
他人にとつての日常が、実は自分にとつては非日常だつたり。

これは、少し頭の変な14人の哉篠町での日常を描いた物語です。

一次元大好き 皆南七々波（前書き）

ユーチャー名は零崎吊識。

何故私がこんな名前なのかは分かる人もいるでしょう。
読みやすくしようとthoughtして行と行の間が3行あいてます。
読みにくかったら、教えてください。調節します。

一次元大好き 鮎南七々波

『みなみなみななななみ』とは鮎南七々波と書く。

まあ、『だからどうした？向その変な名前？おいしいの？』と言わ
れてしまえば、

『おいしい訳あるかボケえ！…』と言つしかないのだが。

そんなことは別にどうでもよくて。傍観者である俺、ひしきじせうこり鮎南七々波からから
言わせればこの女、鮎南七々波は、自分が今までやったことのある
どの女より異常過ぎる人間だ。

理由は多々ある。が、これから俺達の生活を見ていく上で分かるだ
ら、あえてそこは読者のお楽しみを奪つことにはやめておく。

何せ俺は傍観者なのだから。余計なことはしなこれ、よく聞われる
だろ？

『余計なことをしそうる人間は命を奪われる』ってね。まあ、これが自分の『よく言われる』ことと、読者の『よく言われる』ことが、上手く一致するかはまた別として。

みなみなみななななみの一次元主義生活及びその周囲の人達の非日常的日常生活。

始まり始まり。

「よーっしー全キャラ攻略うへーー！」

なななみ
々波は布団に仰向けになりながらPFPという形態型のゲームをやっていた。

「や～。長い道のりだつたよ、うんうん。徹夜して頑張っちゃつたよ。命ちゃんルートむずかしかつたなあ～。まさかあそこであんな選択するとば。いや～、つーかれつけちやつたし、いーがいだつたーよお

タ波はそう言つて眠たそうな目を擦つていた。

PFPの電源を切つて目を閉じた。

「14回も友達エンドだつたんだからあ～～チヨーうれびー……。
あ～眠い。チヨー眠い。長時間画面見てたから、目がチヨー疲れた。
でも命ちゃん、『私、先輩のことが…、え…てと、だ…だ…
大好きです！』だつてえ！かーわいいなあもつ…！命ちゃん…！俺
の嫁…！」

何か突つ込むところ多くないか？

今のは『主人公』より年下の後輩らしい。

そしてタ波がやつてているゲームは間違いなくギャルゲーだ。

男性向けの。

：同じキャラ攻略しようとして14回も友達エンド…そんなギャルゲーあるのか？俺は精々難しいキャラだとしても3回で済むもんだ

が。

「もう、ゼロちゃん。分かつてないなあ君は。」この命ちゃんはねえ、今までのギャルゲーでも、BEST3に入るくらい攻略が難しいキヤラなんだよ。インターネット上でも命ちゃんの攻略方法は存在しないし、今でも情報交換が多く行われているんだよ

……それって酷くないか。攻略本とかないのかよ。

「ゼロちゃんの馬鹿ちん。〇と一に還元されてしまえ。攻略本なんて読んだら萎えるだろーが。自分の実力で落としてこそそのギャルゲーだろー。そこが一番の醍醐味じゃねえか。違うか？」

……口調が変わった。軽く罵られたぞ。いつものことだけど。

『違うか？』なんて言われても、俺はあまりそこまで深いギャルゲーに入つたことなんてなかつたからなあ……。俺がやるギャルゲーはそこまで難易度高くなかつたし。

「インターネットの奴らもあえて攻略本を買ってないんだぞ。分かるかオイ？そりゃあインターネットで既に検索しているところで駄

目かもしれないがな、だからこそ断片的な情報で頑張ってるんだぞ

無い胸を張つて言つた々波には悪いがスマン。一つ疑問がある。

：それ、どんなギャルゲーだよ？

「『STEAL HEART』っていう対象年齢12歳のゲームだ
よ。ほひ」

そつ言つて々波は近くにあつたゲームの説明書とパッケージを俺に渡す。

目を閉じているのによく取れたな。

イラストは共通で、桜の木の下で一人の女の子がこっちに手を差し伸べている。

しかし考えてみると『STEAL HEART』って…。

- 1、心臓を奪う
- 2、心臓を奪え
- 3、心を奪つて

の3つの解釈の内にあるよな。まあ確實に3だらうけど。
そういうや、このゲームのメインヒロインって何人だ？

説明書をぱらぱらとめくる。

キャラクター紹介欄は最後のページにあった。

なになに…

主人公に思いを抱く幼馴染、その幼馴染の妹、電波少女、記憶喪失の少女、ボーアイツシユ、男性恐怖症、天才ちびつ娘、天真爛漫関西娘、天然少女、ツンデレ、ヤンデレ、クーデレ、主人公大好きつ娘、良妻賢母おしとやか娘、毒舌少女、ゴスロリ、主人公を慕う病弱な娘、好奇心旺盛娘、アルバイト仲間、義理の妹

WOW! こりやすげえや。萌えの集合体、みたいな?

……つてちょっと待てや。

：メインヒロイン20人とか多過ぎるだろ。会話に困るんじやねえの。「じちゅ」「じちゅ」しそぎて。

「うん。だつて自分が選んだヒロイン以外全員死ぬもん」

：……はい？

「だから、死ぬの。最初に変態親父が死んで、後々選択肢が出まくるからその選択肢によって死んでいくメインヒロイン、生き残るメ

インヒロインが決まるの。何気に友達が生き残るんだよね。それが繰り返されて最後に一人だけ残り、その人と主人公は結ばれるつてこと。友達が最後に残つてるなら友達エンド。そしてこのゲーム、結構理不尽な「ツッドエンド」や「バツドエンド」が多いの。だから難易度高いのよ、全員」

説明を聞いて俺が思つたこと。

これ、対象年齢12歳じゃダメでしょ。メインヒロインが死ぬとか、完璧に17禁ゲームだよ。

しかも何その展開。どんな場面でメインヒロイン達が死ぬ立場になるんだよ。

俺さ、感情移入が人より恐ろしいほどあるんだよ。

そのメインヒロイン全員救おうとして一次創作書きそ уд амは。何でこんなゲームがあるんだよ。

ていうか、難易度高いの当たり前だわな、そりやあ。

…やつって気分悪くならないか? メインヒロインが死ぬなんて。

「大丈夫。私が腐れオタクとしても一次元と三次元の違いは分かるわ。三次元にあるのは絶望と虚無だけ、一次元にあるのは希望と達成」

…それって偏見と言つものではないか？まあ嫌いじゃないが。
どうせ絶対的に正しいモノなんてない。

『あるのなら、キモい』
と武井ならエレーナだね。

：まあ、俺には絶対無理だな。感情移入がすごいから。

「うん、私もそう思う。ゼロちゃんってさ、『機械に心なんてない』
っていう人がいたら、有無を言わさずぶん殴るよね」

：武 神姫やつてたからな。仕方がない。

「うんうん、分かるよ。私もあれば大好き。スキスキダイスキアイ
シテルーつてな感じ」

『スキスキダイスキアイシテルー』ってどんな感じなんだか。

々波はさつきから両手を両手に当てる。相当疲れたんだろうな。
今日は土曜日、高校3年生である俺は学校記念日でお休み。
暇だから々波の家に遊びに来た感じだ。

々波の部屋は散らかっている。

だがそれは決して部屋が汚いという訳ではなく、アニメのCDやフィギュアが部屋の隅から隅まで並べられていたからである。

「ゼロちゃんさわ、もうすぐ高校とお別れだね」

不意に々波は口を開く。

・馬鹿。まだ5月だろ？が。卒業式には程遠いわ！

「でもそれでも、じつじつじつへ、お別れの時つて感じない？ 離しちゃ？」

・まあな。お別れの時が近づいてる」とは最近よく感じるよ、3年生になつてからな。悲しいなんて微塵も思わないが。

「え？ そつなの？ 学園ドラマとかだと全員卒業したくないとか言って涙流すと思うんだけどなあ」

：だつてそりゃあ作りものだろ。高校生活なんてひたすら勉強勉強勉強、ただひたすら退屈な毎日がこつた返すだけだぜ。大人によくいるんだけどさ、高校生のころに戻りたいなんてよく言うけど、今の大人つてのは勉強と退屈が好きなのかね。

「さあ？分からぬ。だつて私大人じやないし」

そりゃあそーか。

人の心なんて誰にでも分かるもんじやないし、ましてや大人の心情なんて分かるものか。

「ま、私も悲しいとか思わないね。逆に早く卒業したいよ。ウチのクラスリア充ばっかりだもん。別にそれが嫌いとかじやなくてさ、
同士がいないからつまんないのよね」

：別にいいじゃん。^{たかし} 露さんとか孤道さんとか、^{フレンド} 仲間ならいっぽいいるぜ。

「そりなんだけどさ。2人とも私達より年上でしょ。同級生の同士^{フレンド}がいなない問題よ。ゼロちゃんと私は高校違うし。終日^{ひねもす}姉妹がいるのは嬉しいけど、^{フレンド}同士^{フレンド}つて感じじやないからね」

「そんなもんか。

「そんなもんよ」

「どう違うんだろ?」

「拒否する『次元』の々波に、「容赦なき優柔不断」のこのみに、「無邪氣スクレーパー」のきのみ。
どれも『異常』と言うタグで囲まれてしまつのに。
そういう意味では3人とも同士だと思つが。
あ、いや違うか。

々波が言つてるのは同士だもんな。
で俺が言つてるのは仲間。
似て非なるものつてこいつこいつとか。
勉強になつたわ。

：々波、そのゲーム、今だけでいいから貸してくれないか？

「うん？……うん。いいよ。新しいセーブデータを作つてプレイしてね。た・だ・し。理不尽な選択肢があるからよーく気をつける様にね」

：へいへい分かりました。

差し出されたPFPに電源をつける。
新しいセーブデータでプレイする。

『俺の名は御神憐^{みかみれん}。何処にでもいる『』へ普通の高校一年生だ』

画面は暗い。いや、黒い。

表示されているのは下にある文字だけだ。だが中々いい出だしで面白そうだな。

『何故か俺は恋愛といつものに縁がなく、物悲しかったりする。だが俺は……』

……ん?

『1、別にそんなことは気にしない』

『2、別にそんなことどうでもいい』

……待てや。

・おーい、タ波。何だかいきなり変な選択肢k t k r

「あ、それ。それね、このゲームで一番大事な選択肢だからね氣をつけて。間違った方を選ぶとどのキャラ攻略しようとしても、主人公がエンドの時に義理の妹殺して自殺するから」

・「んななどうでもいい同じ様な一択でプレッシャー重つ…どんな神経してんだよこのゲーム作った奴は！
何で「んな一択で間違ったら自殺しなくちゃいけないんだよ…」

「ねー、だよねー。だから私もチヨーびつくりしちゃったよ。でもこのゲーム、妙に豪華声優陣なんだよねー。ぶつたまげちやつた

俺もぶつたまげたよ。

お前がこのゲーム持つてて。

買つ時脳みその反射神経でも鈍つたか？

「ヒント教えようか？」

：あるんならぜひ教えてほしいよ。こんな二択でバットエンドなんてむかえたくねえや。ごめんこいつむるぜ。

「一番目の選択肢を選べばいいよ。このゲームはね、いわゆる俺様キヤラが何故かどんどん真っ先に死んでいくんだよ、悪友も先輩も。だから似てる選択肢があつたら、より草食動物系な選択肢を選べばいいよ」

・サンキュー。

1番目の選択肢を選ぶ。

『別にそんなことは気にしない。そんな人生もそれはそれで楽しいことはあるだろ? 誰の人生も幸あるとは限らないし』

結構コイツ、ネガティブ思考なヤツだな。

いや、俺もこの主人公も変わったもんじやないか。
別に現実逃避ではなく、自分の力量を知っている。夢が儘すぎるこ
とを知っている。

だからどちらかといふと根っからの現実主義だ。

『そんな若干のネガティブ思考の俺でも構ってくれる奴はいる訳で』

『それが俺の幼馴染、鶴来小春だ』

そうしてプレイすることなんとなく時間……

俺は泣いていた。

・・・おおおーー！感動しちまつじやねえかこの話……なんで幼馴染
っここんなに優いもんなんだろつなあ畜生……

「どうだつた？ 誰工ンド？」

タ波はすっかり田の調子が良くなつたのか、PFPの画面を覗き込んでくる。

「おお、小春工ンドか。最初でこの子を攻略するのって、結構大変なんだよ。選択肢を一つでも間違えたら死、あるのみだからね。だって相手は釘バットを持ったヤンデレだし？ 幼馴染と主人公がそいつに立ち向かうっていうところがいいんだよね。最後主人公がヤンデレに向かって『悪いけど、さよなら』っていうとか、シンプルで（E）いいよね」

：結構深いな…。幼馴染がヤンデレの女に立ち向かうといひなんて
もう涙腺がヤバかつたぜ。ストーリー性はもうヤバいな。（E）ぜ。

「すっかりハマったみたいだね。うふふん。でもさあ…じ・か・ん
大丈夫なのかなあ？」

々波に言われて、壁にかかる時計を見る。
……7時！？マジかよオイ！？
無乃がご飯作つて待つてる頃じゃねえか！！

俺は足元にあるフイギュアやじロを踏まないで元に氣を配る。

：悪い々波！俺そろそろ帰るぜーー！

「べっぴー

人が大慌てで変える準備をしているのにも関わらず、呑気な声色の
々波だった。

畜生！

ヤベえヤベえヤベえ！

々波に言われて持つててきたアニメマガジンをバッグに入れて部屋を出る。

「あ、ひ、ゼロちゃん。もう帰っちゃひの？」

階段を下りたといで々波の母、々繩さんなななわに会った。
いやいや、もうひと言つたって約7時間もここに居たんだから。

「はい。名残惜しいですが。また来ます。

「今度は無乃ちゃんも連れてきてね~」

…家族揃つて呑氣な声色だった。

一次元大好き 風間七々波（後書き）

誤字や脱字、文法の間違いなどがあったら、教えてください。
よろしくお願いします。

ちなみに次回は、ブラコンの妹が登場します。

超プラコン病 條軒無乃（前書き）

追試が一つあつた零崎弔識です。
更新が遅れて申し訳ございませんでした。

超プラコン病 拳軋無乃

昔よくやっていたことが今ではやつてはいけない、ところのほうが
あるもので。

それは例えば。

戦争。スバルタ教育。警察がよくやっていたと言われる強制的な自
由。

それをやれば勿論、警察に捕まってしまう訳で。

本人の故意ならともかく、巻き添えを食いたくないものだ。

だが俺の妹はそのことで俺を巻き込もうとしていた。
それは。

血縁関係での、結婚。

拳軋無乃、俺を含めた13人はいつも思つ。

何故、いつは今この時代に生まれてきたのだろう、と。

みんなみななななみの一次元主義生活及びその周囲の人達の非日常的日常生活。

始まり始まり。

妹の部屋はプライベートといふ言葉が通じないほどいくありふれた部屋だ。勉強用の机、そこに座るためのイス、そしてベッド。ただこれだけである。

「おにーちゃん?」一んな夜まで。何処で?何を?していたのかなあ?」

修羅場だ。ただただ修羅場だ。

今ここで必要なのは事実ではない。

男の意地やプライドを捨ててまでも生き残ること。

ただそれがどうやって、「現代破壊のスレンダー」と呼ばれる轟轟
無乃相手に出来るところのだろう。

……いやあ……そのお……ですね……。

「おひこーちゃん」

無乃是そう言って自分の右足を俺の頭の上に乗せた。
今どんな状況かと言つと。

無乃が女王様の様にイスに座り、その前で俺が土下座をしていると
いう状況だ。

今この状況なら、俺は断言できるだろう。

『俺は日本一威厳のない兄だ』と。

思つと情けない。

思うだけで情けない。

今なら羞恥心で死ねる気がする。

いやもういつそ死んでしまおうか。

もう楽になるのかもしれない。

なんて落観思考はアマゾン川のピラニアにでも食わせておいて。

どうやって俺は明日の日を拝めばいいのだろう。

プルルルルル……

不意に部屋の隅に置いてあつた電話が鳴り響く。

「チッ……電話かよ。いいところなのに」

何処がどういいところなんだよ。

お前にＳＭプレイの趣味があつたなんて初めて知つたぞ。
お兄さんは悲しいよ。

「はい、もしもし。犇軋ですが」

その声は得物を誘つ人魚の様に甘く、誘惑的だつた。
受話器を握つている無乃の表情は満面の笑みだ。

だが電話相手が誰か分かつた途端、無乃の表情が一瞬にして豹変した。

「はい。あ…。んーだよ。てめえかよ。皆南七々波！こんな時間に
何の用だよ！ああ！~ひるせえな、ブランコンとか言ってんじやねえ
ぞ！事実だけに拒否できねえんだよ！ああ！？近親相姦の何が悪
いってんだ！愛は血縁関係をも超えるんだぞオイ！！」

そんな愛、俺は要りません。

でいいか、各派の本名をよく用ひがまでは言えたな

俺なんて「お元気か」「血がタバコ出でたのに

「はあ、ギャルゲー？妹のお兄ちゃんがそんなことする訳ねえよ！ああ！？…………はあ？な、何だよそれ。意味分かんねえし……えつ……そ、なんだ…。う、うるさい！照れてなんてねーよバーカ！…」

怒つたり照れたり、感情豊かで結構なことだ。

それは『人間とは本来感情豊かな動物である』という誰かの偉人の言葉を崇拜する訳ではなく。

勿論、
変な意味は含んでないデスヨ？

でも何故、無乃は照れているんだろう。怒る理由は聞くまでもなく分かるのに。

もしかして、夕波が無乃に告白したとか？

その答えに無乃是戸惑いながらも2人はめぐりめぐ百合の世界へ。

10

……まあ、それはないな。自分の妹に何を期待してるんだ俺は。
兄貴失格を超えて人間失格だぞ。

……当たり前のこと、言つてもいい?
絶対々波、俺がギャルゲーをやつてたことを無乃に言つたよね?

「ま、まあ…々波、ありがと」

そう言つた無乃の顔はリンゴの様に紅潮していた。
やはり告白されたのだろうか?
と、俺が立ちながらそう思つてゐる時だった。

無乃が受話器を元の位置に置き、じあらを向いた。
橙の瞳は蒼いツインテールの前髪で隠れて見えない。
無乃が首を少し前に垂れているからだ。
何だらう?何をされるんだろう?

『ギャルゲーをプレイした兄が妹に殺された様です

何だか何処かの動画にでもありそうな題名だ。
いつもなら笑えるところだが、自分のことなので、洒落にならない。

タイトル

もうすぐそちらへ旅立つかもしれません。

「おにーちゃん…」

人魂の様に、ゆらーリ…、ゆらーリ…、と無乃が近づいてくる。まるで狂気に満ちた殺人鬼の様に。だが。

「もうー！お兄ちゃんってばー！照れ屋さんなんだからっー！」

だが無乃の行動は俺の予想を大きく裏切った。

無乃の声は怒りではなく、どちらかというと歓喜だった。

そして理由がさっぱり分からぬ俺がなぜこうなったのか考えていた時。

無乃が俺に抱きついてきた。

そしてそのまま力の方向に任せ、床に倒れ込む。

・痛つ！

俺は思わず叫び声をあげた。

後頭部に衝撃が走る。

それでも、無乃是俺に抱きついたままだ。

「 飢えてる？ 飢えてる？ 飢えてるんだよねえ？ そうだよねえ、今の世の中、近親相姦は犯罪だもんねえ？ 禁忌だもんねえ？ うふふふふ^{タフ}」

……無乃、お前、恐い。めっちゃ恐いわ。

しかも何を言つてるんだ？ 俺が何に飢えてるつて？

「 何もギヤルゲーで実妹キヤラ攻略しなくてもいいじゃーん。妹はいつでも歓迎なんですヨ？ お兄ちゃんが一線越えるんなら

一線を越えて死線に行つてしまいそうだよ。

：お、おい。離れる無乃。お前が何を言つていいのか分からん。しかもこの状況を誰かに見られたらどうするんだ！？

「大丈夫。いや、むしろ全国の皆さん見てつけちゃいましょう。これがもしライトイノベル化したら、この場面はきっと挿絵が入つているに違ひないです！」

お前は浜木綿え のか！？

いやいや、シツ ロミ ドコロはそこじゃなくて。
これがライトイノベル化されたらなんて言つが知つてゐるか？
『世も末』って言つんだよ！

「あ、でもそうしたら日本には住めなくなっちゃうよね。外国にでも行く？」

：勝手に話を進めるなバカ！！

俺は無乃のこめかみを右手で掴み、握った。
そして無乃の顔と俺の顔の距離を離す。

「イタタタタタ、割れちゃう割れちゃう割れちゃう・もつ、お兄ちゃん容赦ないんだからー・ドンだね！」

：死ねえ！！

俺はこめかみを右手から離した途端、左手で無乃を殴った。殴られた無乃是そのまま吹っ飛ばされて後頭部を打つ。

無乃是、目が渦巻状になつており、口がポカンと開いている。

…うん、完全に気絶しているな。

よかつた、またこれで犯罪者が減つた。

日本の平和は守られたのだ！

そういえば。

々波は無乃に何を吹き込んだのだろう、と俺はふと思つた。

無乃から電話を借りることにして（本人に許可は取っていないが）、
々波に電話をすることにした。

：何だけなあこいつの家の番号。名前と同じなんだよな。えーと、
3 7 3 7 3 7 7 7 7 7 3 ? だけ。いや確か…。

誰も聞いていない独り言を言いながら、々波の電話番号を入力する。

フルルルルル…

「はいもじもし。皆南七々波の内、皆南七々繩ですが？」

…よく舌を噛まなかつたものだ。俺には絶対無理。
それとも自分の名前だからこそ、生きてこらつひたそれに慣れ、平
氣になるのだろうか?
慣れって良いものでもあり、悪いものでもあるんだとこつこときをよ
く思い知らされる。
いい勉強になつたよ。

…もしもじ。零苟ですが。々波さん、いらっしゃいますでしょうか?

『ええ、いるわよ。そういうえげ口ちゃん、そんなに理ある必要な
んてないのよ？もう幼馴染からの付き合いじゃない。普通に々波で
いいし、私に対しても、もう少し甘えてもいいのよ~』

それは、俺にとつては少し嬉しい言葉だった。

別に変な意味は含まれておらず。

さっき言ったかどうかは分からなーいが、俺と無乃には両親がいない。
他界したんだ。俺達が幼い時に、とある事故で。

その時に、俺達の心の支えになつたのが、皆南七家である。

：…十分甘えてきましたよ。今今までずっとね。

『わうこう甘えじやなくて、何と言つか……まあこーわ。々波を呼
んでくるから

そつ言つて『木星』の音楽が流れ込んでくる。
やはり『木星』はいいな。

「はーい、『木星』に代わりまして皆南七々波、満を持しても持さ

なくても降臨つー。』

代わつて聞こえてきた声は、随分と陽気で無邪氣な声だつた。

・よお、々波。

『はーはーゼロちゃん、無乃とは死線に辿り着いたかな?』

俺はチラシと無乃を見る。
やはりまだ氣絶している。

:「一や、死線に行つたのは無乃だけだ。いや、そのことなんだけ
どよ、お前さつき、こっちに電話してきただろ? 無乃に何を言つた
んだよ。」

『ああ、そのことね。いやさあ、何かいやな予感がしたんだよ。』
『虫の予感』みたいな

.....。

虫の予感 ×

嫌な予感、或いは虫の知らせ

『氣をつけようね、日本語には類義語がたくさんあるんだから。

『何だかゼロちゃんが無乃に十二下座して頭でも踏まれてるんじゃないかと思つてね』

『虫の予感』にしてはお前、鋭すぎだろ。

『じゃあ念のため確認しようと思つてさ。無乃の部屋に電話をかけたんだよ。そしたら案の定、私が予想してた展開になつてたから』

……お前、見たな？

『うん。ゼロちゃん、土下座してたね。でね、そんなゼロちゃんの痴態を見ていられないから救いの船を出してあげよつと思つてサ』

：それで？

『さつや、『ギャルゲー』で実妹のキャラを攻略してた』なんて言つたら無乃、どうしたと思つ？』

…わざの行動から考へると……喜んでいたな。でも何でだ？

「今の世の中つてさ、近親相姦は犯罪じやん。そのことに關しては多分、無乃はゼロちゃんのことを『一線を越えられない臆病者^{チキン}』と思つてると想うの」

酷い言われようだ。

絶対々波、私情を挟んでるだろ。

『だからギャルゲーで実妹を攻略してたら無乃は喜ぶんだよ。だつ

て『近親相姦が罪』でなければ、『ゼロちゃんが無乃を好き』と無乃是勘違いするからね。仕方なく一次元で満たしているっていう感じじゃない?まあそれでも、完全に満たされる』ではないだらうけど。だって一応一次元だし』

「食ってる? 食ってる? 食てるんだよねえ? そうだよねえ、今の世の中、近親相姦は犯罪だもんねえ? 禁忌だもんねえ? うふふ^{タブ}ふふふ」
わたくしの言葉はそういう意味だったのか。
やつと分かった。

・ありがとう夕波。こんなことがまた起きたら、助けてくれよ?

『うんうん、オーケー オーケー。じゃーね』

ブツン、と電話が切れる音。

受話器を元雄の位置に戻し、再び無乃に視線を移す。

近親相姦、かあ…。

別にそこまでそれを拒む訳じゃない。

無乃がブランコンであるように、俺も少しシスコンなのだろう。

もし、俺達が『近親相姦が当然の時代』に生まれてたら、間違いなく一線を越えたことだろう。

それほどまでに無乃是可愛いし、愛おしい。

誰にも渡せないほど、愛しだろう、緊縛しだろう、どんなわがままも聞いてやつたことだろう。

でもこんなのは夢幻でしかない。

結局、何が正しいなんて時代によつて変わってしまうのだ。

だから、絶対な正義は無い。

世界は誰にでも不公平だ。

俺達には両親がいない。

そして無乃是心に深い傷を負つてしまつた。

だからせめて。

自分の幸せなど、誰にでもくれてやる。

無乃が犯罪に巻き込まれることなく、幸せに生きていてくれれば。

そんなことを考えながら、俺は気絶した無乃を放置して階段を下りた。

：腹減ったなあ…。

今夜はなにを食べるか悩みながら。

超プラコン病 條軒無乃（後書き）

ああ……妹がほしいなあ……。
あ、冗談ですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8441u/>

みなみなみななななみの二次元主義生活及びその周囲の人達の非日常的日常

2011年10月9日04時48分発行